

集合的幸福の概念構築と多世代共創の効果検証

研究代表者： 内田 由紀子

(京都大学こころの未来研究センター 特定准教授)

実施者・協力者： 京都府農林水産部、京都府京丹後市農林水産環境部農政課、カリフォルニア大学、シガン大学、アマタホールディングス、NPO法人ミラツク、京都府京丹後市大宮南地域里力再生協議会

実施地域： 京都府京丹後市大宮町(地方)、京都府京都市南太秦地区(都市部)、関西地域(一般化)

背景

●現代日本は、競争の原理が強まり、社会的なつながり(社会関係資本)が疲弊し、世代間の共創的な関係も減退

●その背景に、世界的に「個人の幸福」のみが目指され、指標化されてきたという経緯あり

※ここでの「幸福」: 人生の評価・満足(≠一時的快樂)



■農村部
□京丹後市大宮町
・高齢化/過疎化
・わずかな都市農村交流
・実証的方法論の不足
★豊富な資源/社会関係資本(企画調査より)

■都市部
□京都市
・孤立化
・世代間交流の断絶
・農村部との交流少
★低下した社会関係資本(企画調査より)

比較/交流

■フィールドとしての意義
□指標開発と地域実践のWin-Win関係
□多世代が集う場の存在
□住民の自主性(「押し付けてない」実践)

プロジェクトが目指すもの

<目標>

●個人の幸福を超え、社会やコミュニティにある幸福状態としての「集合的幸福」概念の構築及び指標パッケージの開発と汎用化

●多世代共創が維持される地域共同体モデルを作成し、国際的に発信する

<明らかにしたいこと>

●集合的幸福を測定するツールを開発

●様々な「つながり」の効果検証

●多世代で構築する共有価値の効果検証

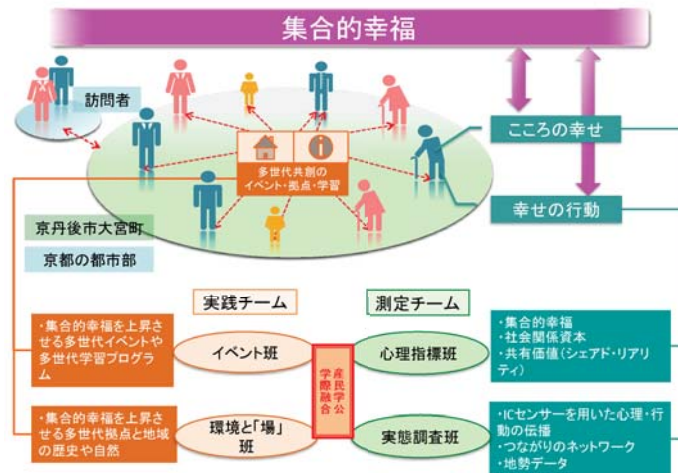
プロジェクトにおける持続可能性、多世代共創

●持続可能性

住民同士の幸福が正の相関関係(win-winの関係)を持ち、コミュニティの幸福が高まり、さらに他のコミュニティともつながりながら持続する状態

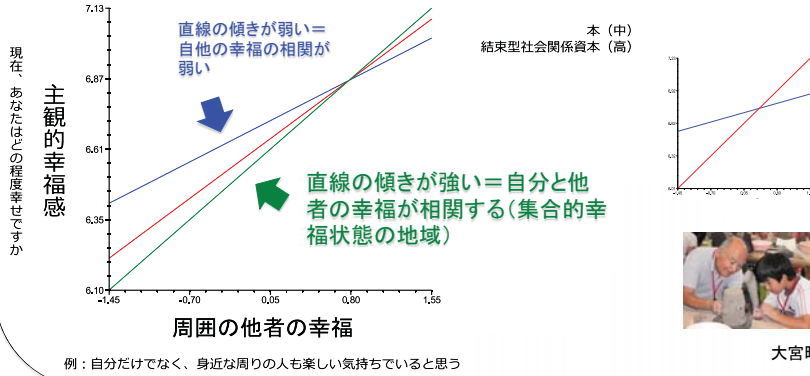
●多世代共創

世代の異なる者同士がコミュニティの内外で価値を共有することで自らの生活環境を改善すること



●わかったこと

○大規模調査より: 地域内のつながり(社会関係資本)が高く、多世代交流が多い地域で集合的幸福状態(自分と他者の幸福が相関する)が生じやすい



大宮町における多世代交流の様子

○インタビューより: 地域住民は自然や他者との結びつきに感謝した幸福観を抱いている

●インタビュー質問

「幸福なくらしとは何ですか？」

- 基本的には健康で、家族みんな元気で、そこそ収入があること。(男性)
- 自然に近いところで人間らしく生きていきたいと思って東京から来た。(女性)
- 田舎の生活は不便だけど、食の安心、食への感謝の気持ちの方が大きい。人の愛情もすごい。(女性)

★洞察: 自然や他者との結びつきに感謝
→持続性のある幸福観



大宮町におけるインタビューの様子

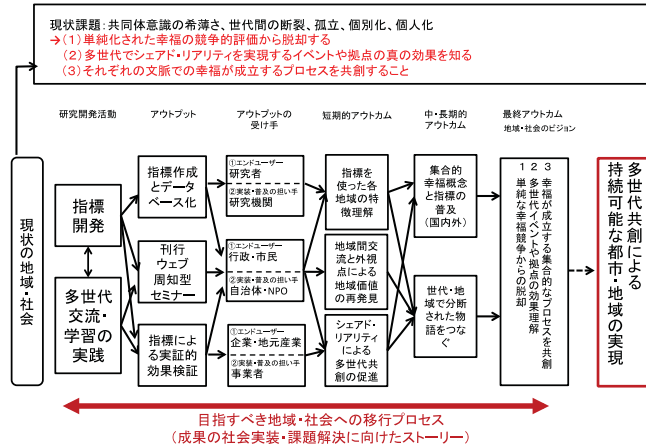
●今後の課題と計画

- 客観的指標(例: 自然環境、地勢データ、歴史)との関連
- 行動データ、生理データ(だ液中ストレス物質など)
- 地域拠点(人の集まりやすい場所)が持つ効果やイベント・行事など、集合的幸福に影響し、かつ、社会実装につながる要因に注目した効果検証を実施

○行動データ(分析中)

社会実装・成果の活用イメージ

- 多世代で価値を共有し、共に創造することの効果を検証する
- 地域住民自らが地域の持続可能性が何であるかを考える場・機会の構築
- 個人へのアプローチ(例: 意識変容や学習)だけでなく、地域全体へのアプローチ
- 国際的発信(2016年の国際学会[国際比較文化心理学会]での発表が採択済み)



目指すべき地域・社会への移行プロセス(成果の社会実装・課題解決に向けたストーリー)